



国立研究開発法人
水産研究・教育機構

プレスリリース

2025年7月31日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2025年度 日本海スルメイカ長期漁況予報

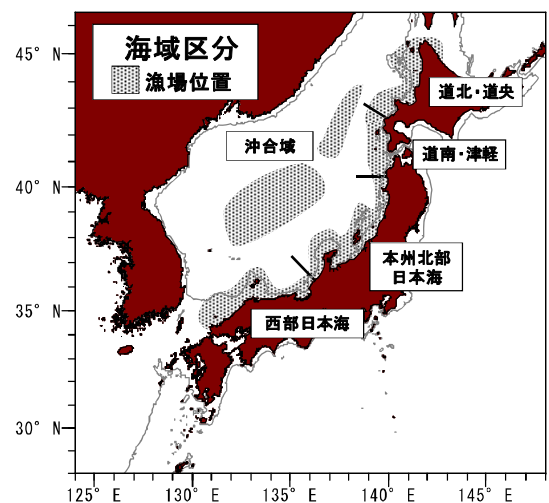
— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2025年8月～12月)のポイント

- ・ 全体の来遊量は前年および近年平均を下回る。
- ・ 道北・道央海域では前年および近年平均を下回る。
- ・ 道南・津軽海域では前年および近年平均を下回る。
- ・ 本州北部日本海海域では前年および近年平均を下回る。
- ・ 西部日本海海域では前年および近年平均を下回る。
- ・ 沖合域では前年および近年平均を下回る。

* 近年は最近5年間(2020年～2024年)

* 道北・道央海域は8月～9月を対象とする。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：浮魚資源部（横浜・新潟） 大島、宮原

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2025年度 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2025年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央海域、道南・津軽海域、本州北部日本海海域、西部日本海海域、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

2. 道南・津軽海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

3. 本州北部日本海海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年と比べ、漁場が形成されにくい。

4. 西部日本海海域（小型いか釣り）

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年同様、漁場形成は不安定である。

5. 沖合域（いか釣り）

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁場：近年と比べ、漁場が形成されにくい。

- * 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。
- * 近年平均は最近5年間（2020年～2024年）の平均、前年は2024年を示す。
- * 道北・道央海域は8月～9月を対象とする。

I 予報の説明

2025年6月上旬～7月中旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査（以下、いか釣り調査とする）の結果（図1～3）、6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過（図4）、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（2025年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、直近の漁況の情報、また、9月までの海況予報（2025年度 第2回 日本海海況予報）を参考として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央海域（小型いか釣り）

本海域では例年6月に漁期が開始され、7月と10月～11月に2回の漁獲のピークがあり、前半は秋季発生系群が主対象である。後半は夏季に日本海を北上した後、南下する群のほか、道東・オホーツク海から宗谷海峡を経由して来遊する冬季発生系群も漁獲対象となる。

いか釣り調査の結果では、本海域のCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数、スルメイカの分布密度を示す）の平均値は、一調査点で比較的高い値をとったため前年を上回ったが、近年平均を下回った。また、8月～9月に本海域に来遊する群の分布密度を示す道南・津軽海域の平均CPUEは、前年および近年平均を下回った。本年は6月以降の漁獲が無く、近年同様、漁場形成は見られていない。以上のことから、8月～9月の来遊量は、前年および近年平均を下回ると予測される。なお、10月以降については冬季発生系群が漁獲の対象に加わるが、現時点では宗谷海峡からの来遊量に関する判断材料が揃わないため予測ができない。

2. 道南・津軽海域（小型いか釣り）

本海域では従来、6月～9月に秋季発生系群を対象とした漁獲量のピークがある。また、11月～12月には、夏季に日本海を北上した後に南下する群のほか、太平洋側から津軽海峡を経由して来遊する冬季発生系群を対象とした漁獲量の増加が見られる場合があるが、近年はほとんど見られていない。

いか釣り調査の結果では、本海域の平均CPUEは前年および近年平均を下回った。また、本年の5月以降の漁獲は無く、近年同様、漁場形成は見られていない。一方で、予報期間後半の来遊量に関係する太平洋側の冬季発生系群の9月までの来遊量は、津軽海峡～道南太平洋海域は前年並であり、常磐～三陸海域は前年を上回ると予測されている（2025年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報より引用）。本予報期間の漁獲対象は、例年の傾向から10月までの秋季発生系群と考えられることから、本予報期間の来遊量は、前年および近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海海域（小型いか釣り）

本海域では従来、5月～7月が漁期の中心であったが、近年、6月～7月が漁期の中心となっており、8月以降も引き続き漁場が形成される年も見られる。また、12月の漁場形成には、海況が大きく影響すると考えられる。

本年の5月～6月の漁獲量は前年を上回り、近年平均を下回った。ただし、漁場は5月から6月にかけて能登半島の西側に形成されたのみで、新潟県より北側では漁場がほとんど形成されていない。7月に能登半島西部の漁場は一度消失し、その後、下旬に再度漁場は形成されたものの小規模である。予報期間後半の来遊量の目安となる、いか釣り調査における全調査点の平均CPUEは、前年および近年平均を下回った。以上のことから、本予報期間の来遊量は、前年および近年平均を下回ると予測される。

4. 西部日本海海域（小型いか釣り）

本海域では、10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。近年は局所的に漁場が形成される場合もあるが不安定で継続しにくい。

本年の5月～6月の漁獲量は前年を上回り、近年平均並であった。しかし、5月～6月の漁獲の中心であった能登半島西部の漁場および山陰から九州にかけての漁場は、7月にはほとんど見られなくなった。また、10月以降の来遊量の目安となる、いか釣り調査における全調査点の平均CPUEは、前年および近年平均を下回った。以上のこ

とから、本予報期間の来遊量は、前年および近年平均を下回ると予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

本海域では、2000年代以降、8月～11月の北海道西沖と、6月～7月および11月～12月の大和堆周辺海域で漁場が形成される年が多かった。しかし、2019年以降はそれまでの傾向と異なり、北海道西沖では漁場が形成されず、主に大和堆周辺海域に漁場が形成されるものの散発的であり、能登半島周辺海域や佐渡沖が主漁場となる場合もある。

いか釣り調査の結果では、本海域の平均CPUEは前年および近年平均を下回ったことから、本予報期間の来遊量は、前年および近年平均を下回ると予測される。また、参考情報ではあるが、2025年度 第2回 日本海海況予報^{1, 2)}（7月10日発表）によると、今期は予報期間前半にあたる9月までの対馬暖流域の表面水温および50m深水温ともに「平年並」と予測されている。対馬暖流域の水温は本海域での漁場形成に影響すると考えられるが、本年は分布密度そのものが過去最低水準であるため、漁場は形成されにくいと予測される。

¹⁾ https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/fri_20250710_jpnsea-2nd.html

²⁾ 日本海海況予報における平年は1986年～2015年の平均

II 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、日本海側の8道県および水産研究・教育機構による調査船でのいか釣り調査によって調べた（図1）。全50調査点のうち有漁点は22点であり（前年は全45調査点のうち有漁点は34点）、調査海域全体の有漁点割合（44%）は前年（76%）を下回り過去最低であった。

1) 全調査点の平均CPUE

いか釣り調査における全調査点のCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の平均値を、日本海への来遊量の目安として示した（図2）。2025年は0.30尾で、前年（0.38尾）の78%、近年平均（4.53尾）の7%で、前年および近年平均を下回り過去最低であった。

2) 各海域の調査結果

- (1) 道北・道央海域の平均CPUEは0.21尾で、前年（0.16尾）の127%、近年平均（8.7尾）の2%であった。
- (2) 道南・津軽海域の平均CPUEは0.02尾で、前年（0.12尾）の17%、近年平均（0.69尾）の3%であった。
- (3) 本州北部日本海海域の平均CPUEは0.003尾で、前年（0.22尾）の1%、近年平均（0.88尾）の0.3%であった。
- (4) 西部日本海海域の平均CPUEは1.99尾で、前年（1.52尾）の131%、近年平均（3.35尾）の59%であった。
- (5) 沖合域では平均CPUEは0.06尾で、前年（0.20尾）の33%、近年平均（6.43尾）の1%であった。

3) 魚体の大きさ（参考情報）

いか釣り調査の漁獲物の外套背長組成を図3に示す。本年は17cm台にモードが見られ、前年（モードは19cm台）より小さかった。ただし本年は、100尾以上を測定した調査点が2点しかなく、日本海全体の特徴を捉え切れていない可能性が高いため参考情報とする。

III 各海域の漁況の経過

2025年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。道北・道央ならびに道南・津軽海域は、一部暫定値であるが漁獲が無く、近年同様、漁場形成は見られていない。本州北部日本海海域での漁獲量は、4月は前年の31%、近年平均の43%と低迷した。5月～6月は前年の140%、近年平均の36%であり、前年を上回り、近年平均を下回った。漁場の中心は石川県能登半島西部海域で、新潟県より北側では漁場がほとんど形成されていない。西部日本海海域での漁獲量は、4月は前年の108%、近年平均の53%であり、5月～6月は前年の287%、近年平均の102%で、5月以

降は前年を上回り、近年平均並であった。漁場は能登半島西部と山陰～九州北部海域にかけて形成された。

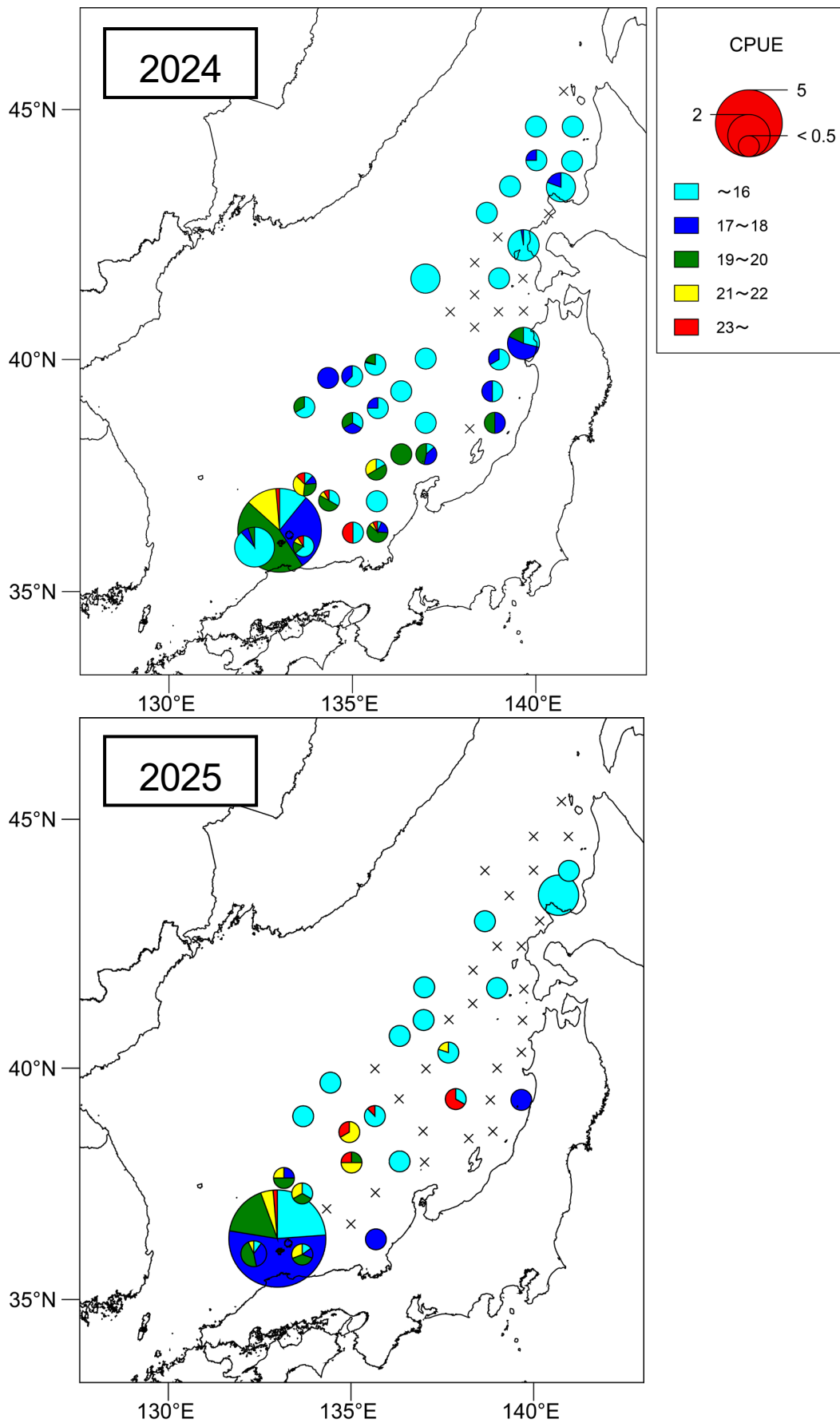


図 1. 2024 年、2025 年のいか釣り調査における CPUE（いか釣り機 1 台 1 時間当たり漁獲尾数）の分布
 図中×は漁獲無し、●の面積は各調査点の分布密度の指標となる CPUE を示す（CPUE が 0.5 未満の点については●の面積を最小とした）。また、各色は各外套背長範囲(cm 台)の比率を示す。

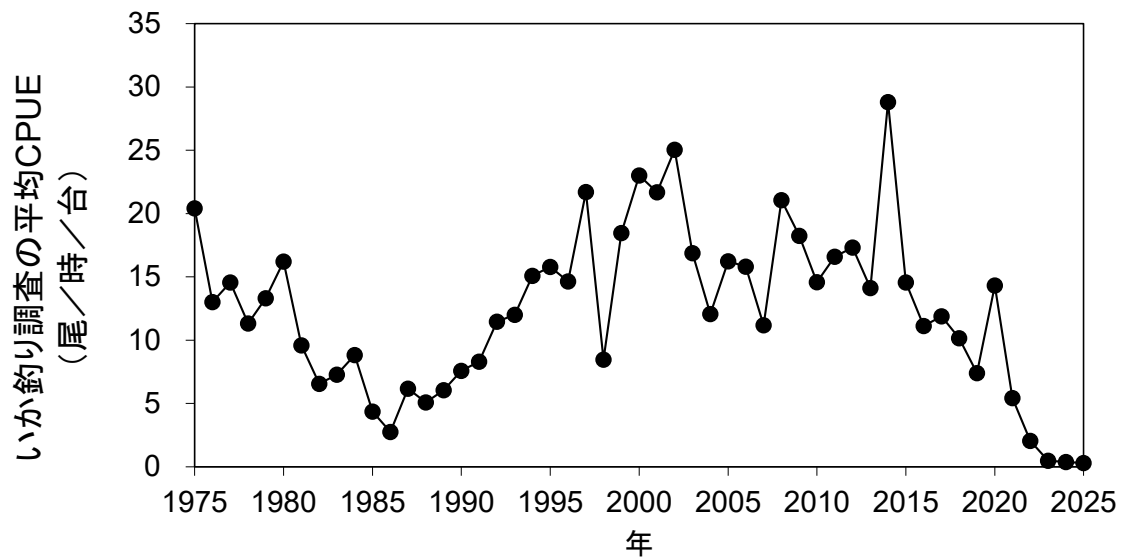


図2. いか釣り調査における全調査点の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の推移

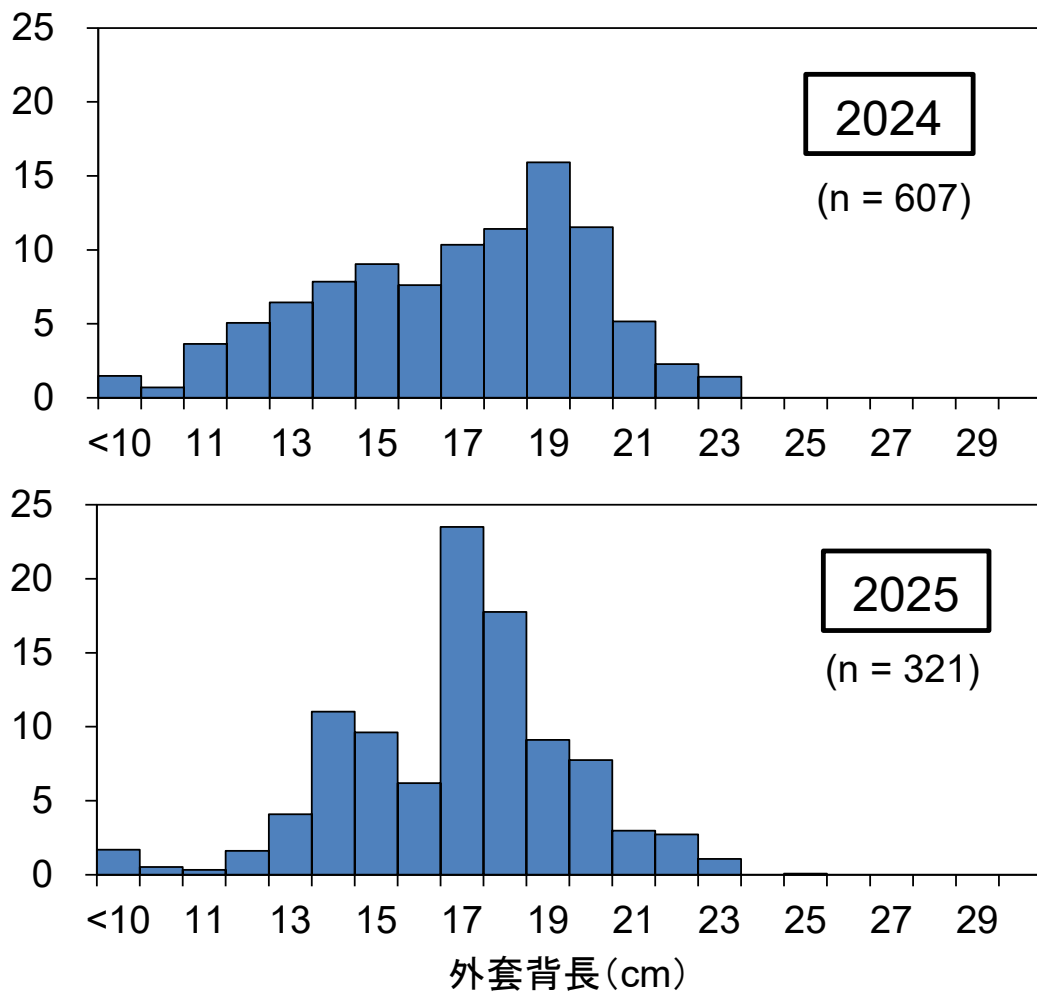


図3. いか釣り調査で採集されたスルメイカ外套背長組成

各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している。図中のnは測定尾数を示す。

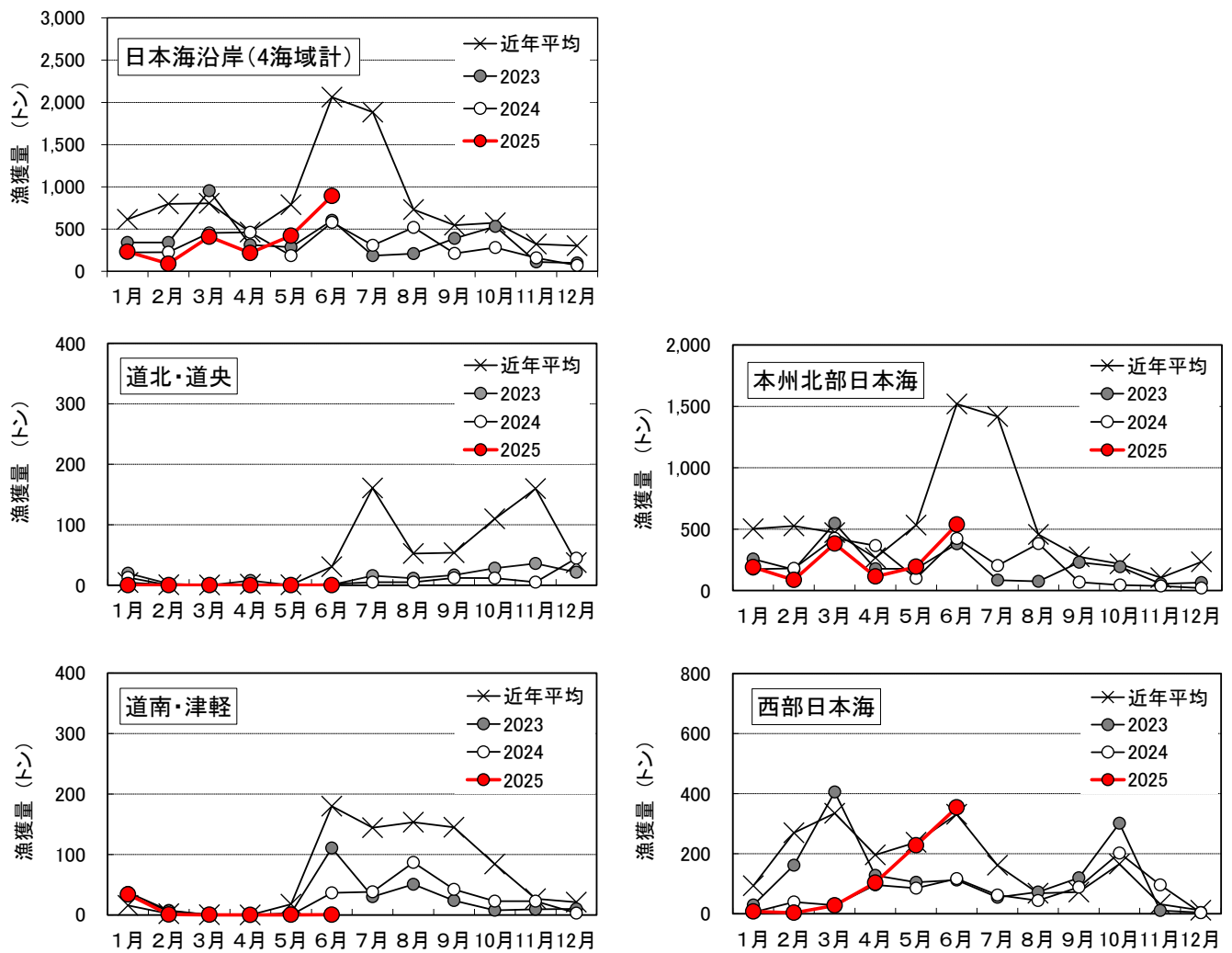


図4. 日本海沿岸（4海域計）および日本海各海域における生鮮スルメイカの主要港漁獲量の推移
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料に基づく。一部速報値を含む。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 函館水産試験場 中央水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所